後悔と懺悔

のりまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
後悔と懺悔

【Ｎコード】
Ｎ８４６２Ｉ

【作者名】
のりまき

【あらすじ】
小学生時代に戻ったとある男のお話。

それは、初めて手を繋いだ瞬間だった。

ふわりと浮いていて、暖かく包み込んでくれる。懐かしみがあるのは嘘なんかじゃない。

隣で震える彼女の横顔を見て、コウスケはようやく思い出したのだった。

その汚れのないモチモチとした肌は、彼の想像を鮮やかに塗り替えていく。ただ、その幼顔に映える瞳は彼の思い出通りの輝きを放っている。

小学六年生の夏。コウスケは初めて彼女と手を繋いだ。緊張と不安が入れ混じる、肝試しの闇の祝福。

そんな場面に出くわしているのだと、彼は思い出し気づいた。

“出会い”なんて、偶然を兼ね備えた大げさな表現は似合わないが、小学三年生のとき、コウスケは彼女のクラスに転入してきた。父親の転勤だとかで転校することになったのだが、今も昔も、そんなことに興味はなかった。

友達を作るのに、時間なんて要らなかった。もちろん、彼女と仲良くなるのにも。

何も意識することなく、彼女も含めた数人のグループでいつも遊んでいた。昼休みは校内を走り回り、放課後になれば校庭に集まり

ドッヂボールやサッカーなんかもやっていた。

気になりだしたのはいつからだろうか。

特別な何かがあったわけではなかった。きっと、そのせいで気づくのが遅くなったんだ。

「コウちゃんと遊ぶのって、久しぶりィ」

夜の校舎に入る前、彼女は楽しげに口角を上げた。

本当なら、そこで気づくべきだった。しかし、コウスケは手を繋ぐまで気づくことができず、何も言葉を発せられなかった。あの時と同じように。

先を進みながら、コウスケは一歩ずつ思い出していた、小学生時代の彼女との思い出を。

窓から照らしこむ不気味な月光が、闇へと吸い込まれていく。

時々聞こえる物音に、ぎゅっと握り締められた。弱々しく可愛らしい手が彼女の暖かさを伝えてくれる。

この肝試しに特別なものは存在しない。校舎を漂う闇が続くだけで、何もないことをコウスケは知っていた。それでも、緊張せずにはいられなかった。

「五年になってからさ――」彼女の震える声に、思わず反応してしまう。「なんか、遊ばなく、なったよね？」

声が出せなかった。緊張からではなく、単に思い出せなかったのだ、小学生のときの自分の口調を。

「クラス替えもあったし、ウチだけ、違うクラスに、なっちゃったからかもだけど」

口調なんてどうでもいい――彼女の話を聞きながら、コウスケはそう思いながらも過去を詮索し続ける。何でもいいからさっさと口を突いて出てくればいい、と思っているのに、未だにどうしようもないほどに口調にすがっている。

「ねえ、コウちゃん――」

彼女の甘い音色が、コウスケの耳をかすめる。

「好きな人、いる？」

とうとう訪れてしまったこの瞬間。コウスケの記憶の奥底に沈みきっていた、悔いと悩みの塊。塗り替えるべき思い出。

今までの、驚きと共に握り締めた力以上に強く、彼女はコウスケの手を締める。月光を取り込む瞳がまっすぐコウスケの視線を捉えていた。

「い、いるよ」

ようやく吐き出された言葉に、彼女の瞳が力を込める。

その瞬間、コウスケは気づいた。本当は、口調なんてどうでも良かったんだ。そんなこと、思い出したって何もならない。もっと重

要なことに気づくべきだったのに、遅すぎた。

思い出すべきことは、彼女の――

「今日はありがとう。お別れ会なんて、開いてくれて！」

校舎を抜け出た彼女は、みんなのお出迎えを快く受け、胸いっぱいに声を張っていた。

結局、コウスケは何も言えなかった。するりと抜けていく手を掴むことも、逸らされる瞳を振り向かせることも、何にもできやしなかった。

ただ、彼女の零した言葉だけがコウスケの耳をざわりとくすぐる。

「なんで、ウチだけが離れていくのかな……」

彼女が自分の目の前からいなくなってしまうことを、コウスケは知っていた。それだと言うのに、何も言葉が出てきてくれなかった。出てきたところで何かが変わるのかはわからない。それでも、コウスケは自分の過去を塗り替えるどころか、その色をさらに濃く塗りたくってしまったのだ。

「どんなに状況を思い出せても、大事なことを思い出せないんじゃ意味がないな。どうだ、もう一度試してみるか？　とは言え、同じ過去とは限らんがな」

過去の出来事を再度体験できる『回想マシーン』。

コウスケは、この機械に依存し抜け出せなくなった“過去放浪依存症候群”と呼ばれる類の人種へと変貌していた。

「大丈夫さ。もう“後悔”したくないから」

ヘルメットをはずすコウスケに、髭面の男が手を差し出す。

「お次は、五十万頂戴するよ」

【完】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8462i/

後悔と懺悔

2011年10月3日10時59分発行